

昭51-45128

特 許 公 報

⑨ 公告 昭和51年(1976)12月2日

庁内整理番号 6948-36

発明の数 1

(全 2 頁)

1

2

④ ゴムクローラの継手

① 特 願 昭50-140901

② 出 願 昭44(1969)6月27日

③ 特 願 昭44-50654の分割

⑦ 発 明 者 山崎晴通

東京都目黒区目黒3の14の5

同 自見賢一

横浜市神奈川区白旗上町141

⑧ 出 願 人 プリヂェストンタイヤ株式会社

東京都中央区京橋1の1の1

⑨ 代 理 人 弁理士 杉村暁秀 外1名

図面の簡単な説明

第1図はこの発明の実施例を、ブリー上まき 15
つき状態で示した断面図である。

発明の詳細な説明

本発明はゴムクローラの継手に関するものである。ゴムクローラは、農業用コンバイン、刈取機、各種運搬車あるいは雪上車などの無限軌道を供す 20
べく、車体の前後車輪間にまきがけ装着して使用され、カバーゴムのゴム実質中にクローラ周方向の引張補強部片として、主にスチールワイヤーの如き金属細線束からなる細条を、クローラの幅方向に並べて配列埋設し、この引張補強部片に対し 25
ゴム実質との間に補強布層を介し、または介しないで弾性結合される横補強部片として多くの場合短冊状をなす金属板をクローラの周方向に定間隔毎にカバーゴム中へ配列埋設する。この横補強部片は、クローラへの駆動力を伝達するスプロケッ 30
ト歯との係合にあずかるのが普通である。

さて、ゴムクローラは、多様な使用条件に適合すべく、一般平調帯の如きと同様に一連りの長尺としてつくられることが多く。この場合スチールワイヤー等の引張補強細条は、ゴム実質中にオー 35
バーラップして、接合され、かくしてクローラをエンドレス化する。

しかしながら、この様にしてつくられるゴムクローラは、スプロケットホイール等の車輪に装架し、駆動した場合、(第1図参照)接地ラグのない部分Pと、それがああるQ部分とで剛性に非常に 5
隔りが生じる為に歪率が異なって剛性の小さいP部分において曲げが甚しく大きく起る。

また、ゴムクローラ1のエンドレス接合部は、引張補強細条2が二重になつてゐるため曲げ剛性が著しく高く、そのため引張補強細条2の末端a 10
では歪が極端に大きくなるので、接地ラグ3がなく大きな曲げが起きるP部分と引張補強細条2の末端aの位置とが一致すると、特にこの部分に大きな歪みが起り、末端aはカバーゴム4に亀裂を生じさせ、ついには引張補強細条2の末端aがカバーゴム4のゴム層を突き破つてとび出し、ゴムクローラ1を破損に至らせる原因となる。

上記考察の結果にもとづいて、この発明では引張補強細条2の末端aの位置として、ゴムクローラ1のエンドレス部において、歪の小さい接地ラグ3の直下に配置することとした。

すなわち、接地ラグ3のあるカバーゴム4のQ部においては、剛性が大きいために歪が小さくあらわれるから、ここに、引張補強細条2の末端aを配置することにより、エンドレス接合部における引張補強細条2との間の歪率の差は僅少となつて、末端aがカバーゴム4に亀裂を発生し、あるいは、これを突破つて跳ね出るといつたクローラ破損の原因が有効に除去される。なお、図中、5は横補強部片、6はスプロケットホイール7はその駆動軸、8は駆動スプロケット歯である。

本発明によればゴムクローラ1のカバーゴム4と一体的に設けられた接地ラグ3の直下に引張補強細条2の末端aを配置したため、従来突発的に発生した引張補強細条2の末端aの跳ね出しのよ 5
うなクローラの急速破損の如き事故が、防止でき、ゴムクローラの寿命を有効に延長することができる。

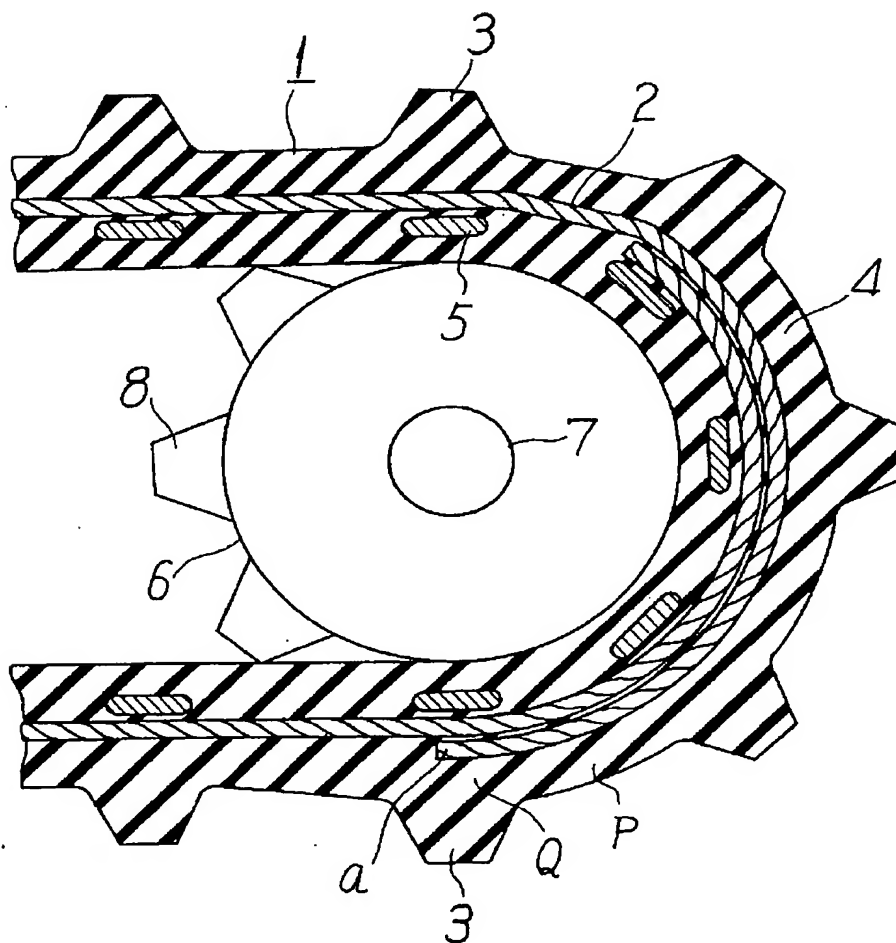
3

4

⑤特許請求の範囲

1 カバーゴムの実質中に周方向の引張補強細条を幅方向に横並べとして埋設し、このカバーゴムの外周側で幅方向にのびる接地ラグを周方向に間

隔をおいて配設したゴムクローラにおいて、上記引張補強細条の両端を相互にオーバーラップさせ、その少くとも一の末端を接地ラグの直下に位置させたことを特徴とするゴムクローラの継手。



第2部門(5) 特許法第64条の規定による補正 (昭和55年2月18日発行)
の掲載

昭和50年特許願第140901号(特公昭51-45128号、昭51.12.2発行の特許公報5(1)-59(280)号掲載)については特許法第64条の規定による補正があつたので下記のとおり掲載する。

Int.Cl.²
B 62 D 55/24

特許第977114号
識別記号 庁内整理番号
6927-3D

記

- 1 第2欄28行「なお、」を「なおエンドレス接合部における末端aの反対側の端部は、図示例においてエンドレス接合部自体によつて包まれるので、これが上述のように跳ねることにはないにしても、前記した歪の著大な差に基く亀裂発生危険域であることはすでに末端aにつきのべたところと同様であり、できれば接地ラグ3の直下に配置することがより望ましいのは明らかである。」と補正する。
- 2 同欄32～33行「直下に……………末端aを」を「直下に、引張補強細条2のエンドレス接合部の、接地ラグを配設したゴムクローラの外周側に面する末端aを」と補正する。
- 3 「特許請求の範囲」の項を「1 カバーゴムの実質中に周方向の引張補強細条を幅方向に横並べとして埋設し、このカバーゴムの外周側で幅方向にのびる接地ラグを周方向に間隔をおいて配設したゴムクローラにおいて、上記引張補強細条の両端を相互にオーバーラップさせたエンドレス接合部を有し、このエンドレス接合部の、接地ラグを配設した外周側に面する末端を、接地ラグの直下に位置させたことを特徴とするゴムクローラの継手。」と補正する。

昭和46年特許願第74444号(特公昭51-39409号、昭51.10.27発行の特許公報5(1)-49(270)号掲載)については特許法第64条の規定による補正があつたので下記のとおり掲載する。

Int.Cl.⁴
B 62 D 55/24

特許第978483号
識別記号 庁内整理番号
6927-3D

記

- 1 「特許請求の範囲」の項を「1 無端帯の中央部が長手方向に亘つて無端帯接地側に向つて断面樋形に凹入された中央凹入部とされ、該無端帯の長手方向に亘り定間隔に列設埋入された芯金が、前記中央凹入部と同様形状であつて該中央凹入部の内側面に嵌め込み状に臨む樋形凹入部を有し、且つ該芯金の凹入部側壁より無端帯の幅員方向に延長して埋入された埋入部を有し、前記芯金の樋形凹入部の両側壁内面が無端帯の中央凹入部に露出されると共に、同無端帯の前記中央凹入部における芯金底壁間に啗合孔を列設されてなる無端帯履帯。
- 2 無端帯の中央部が長手方向に亘つて無端帯接地側に向つて断面樋形に凹入された中央凹入部とされ、該無端帯の長手方向に亘り定間隔に列設埋入された芯金が、前記中央凹入部と同様形状であつて該中央凹入部の内側面に嵌め込み状に臨む樋形凹入部を有し、且つ該芯金の凹入部側壁より無端帯の幅員方向に延長して埋入された埋入部を有し、前記芯金の樋形凹入部の両側壁内面が無端帯の中央凹入部に露出されると共に、同無端帯の前記中央凹入部における芯金底壁間に形成される啗合孔にスプロケットホイール状の駆動輪が啗合され、駆動輪と対応する遊動輪及び中間遊動輪は何れも前記無端帯の中央凹入部に

第2部門(5) 「特許法第64条の規定による補正の掲載」の訂正 (昭和55年4月23日発行)

昭和55年2月18日発行の特許公報55-164(2(5)3(3))中、特許出願公告昭51-45128および51-39409号は国際分類の誤記がありましたので、下記のとおり訂正する。

記

誤
Int.Cl.²

正
Int.Cl.³